
ノー・ダウト・メモリー ～疑いない真実の記憶～

錬金術師？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノー・ダウト・メモリー ～疑いない真実の記憶～

【Nコード】

N6634Z

【作者名】

錬金術師？

【あらすじ】

これは、ブッチ神父が世界を一巡させた際に発生した、パラレルワールドの物語である。ジョー・スター家の血を僅かながら引き継ぐ普通の小学生、黒条 静丞は、ある日突然謎の化け物に襲われ、そこでスタンド能力に覚醒する。不思議な魔法という存在。襲い来るスタンド使い達。その戦いの中で、静丞は平行世界のジョー・スター家の深い因縁を知ることとなる…… / / / / g d g d な文章前回は簡便してください。そしてちゃんと「リリカルなのは」は出てくるのでご安心を。そして「ジョジョの奇妙な冒険」よりキャラ

が数人出ます。尚、敵オリジナルスタンド及びスタンド使いを応募
しております。／／／／タイトル正式に決定いたしました。元「
ノー・ダウト・メモリー（偽りではない記憶）」です

ブローグという名の第一話（前書き）

ブレないggggですが、よろしく願います。

そして敵オリキャラ&オリスタンドのアンケートも募集しております。

ブローグという名の第一話

キンコンカンコン。

授業という名の拷問の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「ふあ……。……ねみいな」

大きな欠伸をして、目をぐしぐしと擦る。

教室にいる生徒の半分以上は即行で荷物を鞆の中になおすとそそくさと教室から出て行き、また別の人は教室に残って友人らしき人物とお喋りを楽しんでいた。

「さあてと、俺もそろそろ帰るかね。……あん？」

机の中にある教科書を取り出すと、見覚えのないネックレスが落ちた。

なにやらひし型にカットされた青い宝石のような物が付いており、見た目は値打ちものつぽそうだ。

「これなんだ。ツ!？」

なんとなく気になり、ネックレスに触れると——急に、鈍い頭痛が俺を襲った。

「ぐッ」

すぐにネックレスから手を離すと、頭痛はピタリと止んだ。だがしかし、まだ若干頭が痛いような気がし、頭をおさえる。

「んだよこれ…なんで触れるだけで頭痛がするんだ？」

とりあえず、この頭痛の原因であるネckレスを調べようと思い、今度は直接触れないように気をつけ、ハンカチ越しにネckレスを掴もうとするが……触れない。

「あれ？」

たしかに掴んだと思ったのに、なぜかハンカチ越しの手はすり抜けてしまった。

一瞬、これは俺が見ている幻覚かなにかと思ったが、その考えはすぐに否定する。なぜなら、ネckレスはちゃんと俺の目の前にあり、さっきはちゃんと触れたのだから。

「おーい。ジヨジヨ！」

考え事をしていると、後ろから俺をあだ名で呼ぶ声が聞こえた。ハンカチをポケットに仕舞うと、顔だけをそちらへ向ける。

「なんだ。山田か」

「なんだとはヒデエなあ。全国の山田さんに謝れ！」

ナハハと笑いながら、山田が言う。

「なあなあ。今日俺ん家ちこねえ？実は最新ゲームの「SSS」スベスベとトムが手に入ったんだあ。一緒に対戦しようぜ」

「お、いいなそれ。どうせ今日も両親帰ってこねえだろうし、夜まで遊べるぜ」

「マジか！それじゃ早速行こうぜ！」

「ちよつと待てよ。荷物入れたらすぐに……あれ？」

机の中に残っている教科書を鞆に入れようと、机の中に手を伸ばすと、偶然俺の机の下が見えた。

そこには、さっきまであったはずのネックレスが無くなっていた。最初から、あのネックレスの存在そのものが無かった物のように……。

「ジョジョ？」

「ッ。あ、いや。なんでもない」

山田の呼びかけにそう答えると、ネックレスのことはもう忘れようと考えながら、山田と一緒に教室から出て行った。

この時の俺はまだ知らなかった。あのネックレスと出会ってしまったということが、日常から非日常までの片道特急キップ^{タダ}を無料で貰ってしまったということに――

「あゝ、しまった。すっかり遅くなっちまったな」

頭の後ろをポリポリと掻きながら、すっかり暗くなった家路を歩く。

怖いとかそういう感情は抱かないが、なぜか知らないが……今日は何か嫌な予感がしてなかった。

今日のあのネックレス。そして触ると同時に俺を襲った頭痛。ハンカチ越しでは触れない。いつの間にか消えていた。あらゆる謎が襲い掛かる。

何よりも謎なのは、なぜ、ハンカチ越しでは触れなかったかだ。

マジシャンとかの手品ならば納得はまだいく。だがしかし、あの

場にいたのは俺と山田。そして数人のクラスメイトのみ。誰も俺の席に近づいた形跡はないし、俺も殆ど席から離れなかった。

「うーん……。ダメだ。さっぱりわからん」

ワシャワシャと髪をグシャグシャにしながら言う。

「はあ。シャワー浴びてスッキリして寝るとするか」

こういつ日は寝るに限る。そう結論付けた俺は、家路を急ぐ。しかし、俺の家の門が見えてきた時だった。なにやらグジュル……グジュル……という、なんともいえないグロテスクな音が聞こえてきた。それも、俺の家の門の前から。

「？」

いったい何の音なのか疑問に思った俺は、よく目をこらしてそこを見る。

家の門に備えつけられた蛍光灯が照らした。ソレは、生物と呼ぶにはあまりにも不適切で、あまりにもおぞましかった。

「なんだよあれ……」

呆然とつぶやき、本能的に一步後ろに下がる。

「……■ ■ ■」
「ひっ」

ソレは、なにか呻り声を上げながらこちらを向く。
まるで子どもが粘土で作ったようなソレの姿は、口で説明す

ることができない。

「うっ、ああああ……」

恐怖で声が出ない。助けを呼ぼうにも、声が出なくては助けを呼ぶことはできない。いや、それ以前にここは住宅街から結構離れた所だ。仮に出たとしても、意味がない。

俺は死の恐怖からか、目の前にいる ソレ から目を離すことができない。

「■■■■■■■■」

ソレ は僅かに口を歪めると、こちらへとにじり寄って来る。身体が、動かない。動かそうとしても、全身の筋肉が全て硬直してしまったかのように、ピクリとも動かせない。

「キュウーン……」

「え？」

不意に後ろから鳴き声が聞こえてきた。視線を向けると、そこにはなぜか子犬が一匹おり、 ソレ を見て怯えていた。

「なッ！に、逃げろ！犬！」

かろうじて出た声で、その子犬へ怒鳴る。しかしその子犬は、 ソレ へ視線を向けたまま一切動いていない。

「くっそ！」

悪態をつき、なんとか立ち上がると、震える身体に鞭を打ち、ソレとは別の方向へ走っていく。

「逃げるぞ！」

「キャウン！？」

走る途中で子犬を抱き上げると、驚いたふうな鳴き声が聞こえてきた。

心の中でゴメンと謝りながら、俺は家路を逆方向に疾走する。

「ハア……ハア……ッ！」

息を切らしながら、熱が籠ってだんだんと重くなっていく脚を無理やり動かし、ひたすらに、我武者羅に走る。

時々後ろを振り返っては、ソレとの距離を測る。が――

「■■■■！」

「チイツ！足速すぎるだろ！」

走るそばから距離をつめられ、一切距離を広げることができない。最悪でも、この子犬だけは逃がそうと考えた時だった。

「ッ。ぐあ！？」

何かに足を引っ掛け、盛大に躓いてしまった。

反射的に反転し、背中から地面へ倒れたおかげで、子犬にケガは一切無かったのだが、俺へのダメージが大きい。

「ぐ……っ」

「クウーン」

子犬が、大丈夫？とでも問いた気に俺へ鳴いてくる。
安心させようと笑顔を見せようとしたが、迫ってきている　ソ
レを見て、一気に頬を引き攣らせる。

「おい、犬」

「クウン？」

「お前だけでも逃げる。お前は生きる」

そう言い、子犬を傍におろしてやる。

痛む身体に、震える身体に鞭打ち、俺は立ち上がり　ソレを
睨む。

「俺が気を引き付ける。その隙に逃げる」

恐怖で頭がどうにかなりそうだ。だが、それでもこの子犬だけは
守りたい。そう俺は願った。

それこそ、この命を賭してでも　だ。

今まで俺は、無自覚に仮面を被って生きてきた。

たった^{よわい}齡十の若造が、今までという言葉を使うのは不適切だろう
が、それでも今までだ。

弱いやつがイジメを受けていても無視。助けを求めてきても無視。
厄介ことは、全て無視をきめこんでいた。

だが、今は違う。理由は知らないが、今後ろで怯えているこの子
犬を、なぜか知らないが　命を賭してでも　守りたいと思ってい
る。願っている。

「さあ行きな。走れ。振り向くな。俺は大丈夫。だから気にするな
な？」

精一杯の笑顔で子犬へそう言うが、それでも震える身体を隠すことはできない。

動物は、人一倍人の感情に敏感とよく聞くが、恐らくこの子犬は俺が本当は怖くて仕方が無いと思っているのをわかっているだろう。だからなのか

「わん！わん！」

子犬は ソレ へ向けてほえていた。

1. ☐ ☐ ☐ ☐ ?

「わん！わん！」

■ ■ !

ソレ はそんな子犬を見下ろすと、おもむろに大木のように大きく大きな腕らしきものを振り下ろす。

俺は本能的に、子犬の元へと走る。

止まれ！という警告が頭の中に響く。だが、それを無視して子犬の元へと突っ走る。

「間に合ええええええ！」

ジャンプし、その子犬をキャッチする。

しかし、腕はすぐそこまで迫ってきていた。

（ああ。俺、ここで死んじゃうのか）

その拳は段々スローモーションに見えてくるのを自覚すると同時に、頭の中に何かの光景がフラッシュバックしていく。

金髪の男を、■■■を相手に幽霊のようなものを使って戦う学ラン姿の男の姿。金色の幽霊を用いて、桃色の髪をした男を圧倒する男の姿。そして、愛する者のために吸血鬼と戦う一人の男の姿。そのいずれもが、どんなに勇敢な人間なのか人目でわかる。

（ははっ。なんだよ、この光景。わっけわかんねー）

だが同時に、嫉妬した。

この三人は、巨大な敵を相手にしながらも決して諦めず、その敵を倒した。それに比べ今の俺はどうだ。目の前の敵に目を背け、ただただ怯えているだけじゃないか。

（まったく、本当に……なっさけねー。情けなさ過ぎるぞ！静丞！）

もうすぐ眼前まで迫ったその拳を見ながら、自分へと怒鳴る。

（俺はまだ終わっちゃいねえ。人生は！運命は！まだ……）「終わっちゃいねえええええ！」

叫ぶ。同時に、その拳は動きを止めた。

『全く。危ねえ危ねえ』

そんな声が聞こえてきた。

どこかエコーがかかったようなその声は、声の低さからして男であろうことがわかる。だが、疑問なのはそこではない。なぜ俺のすぐ耳元からこの声が聞こえてきたのだろうか。

『勇ましいことはけっこうなんだけどよ。もうちっと、後先考えようぜ？静丞』

俺のすぐ後ろにいた目隠しをしている男は、けたけたと笑いながら言う。

「お…前は？」

もっともであろう俺の質問に対し、その男は口元だけで笑うと、こう名乗る。

『俺はお前の刃であり、スタンド。名前は…そうだなあ。まああとでテキトーに決めてくれや』

男、いや　スタンド　はそう名乗った。これは名乗りと言うべきかどうか悩んだが、それでも名乗りは名乗りだろう。

スタンド　はあの腕を上へ軽く押しのけると、　ソレ　を掌底で吹き飛ばし、民家の壁へとぶち当てた。

「なッ！？」

俺は絶句する。

あの化け物を、いとも簡単に吹き飛ばしたことに對してだ。

『さあ、静丞。イメージしろ！俺はその通りに動かし、今のお前は…前とかなり違うぜ？』
「……………」

自分の掌を見ると、いつの間にか震えと冷や汗は全ておさまっていた。

ギョッ、と拳を握り締めると、子犬をその場におろし、　ソレ　へと視線を移す。

「さあ、行くか。　ノー・ダウト」
『ノー・ダウト……。疑いない、か。ハハッ。いいねえ。その名前気に入った!』

スタンド、　ノー・ダウト　は嬉しそうに言うと、手刀を構える。

『さあ。あのザコを八つ裂きにしてやろうじゃねえか!』
「ああ、そうだな。あのザコを八つ裂きにして、刺身にしてやろうぜ!」

今の俺には、もう怖くなかった。
身体の震えは嘘のように消え去り、手に滲んでいた冷や汗も全てなくなっている。

「『さあ、覚悟はできてるか?三下ア!』」
「■■■■」!?!」

ノー・ダウト　と同時に言うと、　ソレ　はこちらへ突進してくる。

怒っているのだろうが、今の俺にはちっとも怖くないし、脅威にも感じない!

「『オラア!』」
「■■!?!」

ソレ　が眼前まで迫ったと同時に、　ソレ　の胸部分へ下から挟りこむように掌底をたたきこみ、宙に浮かせる。

そして呆然とした様子の　ソレ　へ向け、俺は今までの鬱憤を

晴らすかのように、本能のままに ノー・ダウト を叩き込む！

「『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！』」

「■■■■■■■■！！？？」

相手に防御の隙をあたえない、圧倒的な突きによるラッシュを叩き込んでいく。

それはもはや残像を残す速度で、人体の速度の限界を超えているのだが、そこまで驚くことじゃなかった。スタンド ならば、この程度できて当然だと、なぜか 知っている からだ。

「『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！』」

もはや ソレ はグチャグチャになり、ビチャビチャと地面に血のようなものを撒き散らす、それに構わずラッシュを続けている。

俺が、この子犬が味わった恐怖はこんなものじゃない。それに、この程度じゃあ…まだ怒りたりない！

「『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！』」

ラッシュを続けていくと、次第に何か宝石のようなものが見えてきた。

それから何か禍々しいような気配を感じたので、それへ向け、全力の ノー・ダウト をぶち込む！

「『オラア！』」

その突きは寸分違わず宝石の中心をとらえ、その宝石を粉々に砕いた。

そして、それと同時に周囲に散らばっていた肉片と血らしきものは、全て霧散して消えていった。

「ッ！ハア……ハア……」

それを確認すると同時に、身体中を一気に激しい疲労と倦怠感が襲う。

子犬を見ると無事で、俺を心配そうに見つめていた。

「ハハッ。大丈夫だったか？」

「アン！」

俺の問いかけに子犬はそう鳴くと、俺の元へ一直線に駆け寄ってくる。

「人懐っこいな。お前。野良犬か？」

そう言っただけで、首輪を見つけた。

そこには、「イギー」と書かれており、恐らくこの子犬の名前であることがわかる。

「お前。イギーっつーのか？」

「ワン！」

こくり、と一回頷くと、イギーは俺の胸へダイブしてきた。

『ハハハハッ。人懐っこいなあ。この犬』

「ああ。……で、お前はいつたいなんなんだ？ ノー・ダウト」
『俺はお前でお前は俺で、ってやつさ。よーするに、俺はお前だ』

また分かりづらい説明をするなど思いながら、苦笑する。

イギーをそのまま撫で続けていると、俺はサイレンのような音が聞こえてくるのがわかった。

「やっべ。警察だ」

『逃げんのか？』

「こんなとこにいてみる。確実に事情徴収受けるに決まってる！」

考えてみれば、今いるのは住宅街であり、あんな大声を出していれば誰かが起きるのは必然であろう。

「うっし、三十六計逃げるにしかず。さ、帰るか。じゃあな、イギー」

ポンポン、とイギーの頭を軽く撫で、家路を走る。が

「アンアン！」

「おいおい。一緒に帰るってのか？イギー」

「アン！」

その通り！と言いたそうに頷くと、そのまま俺の横を走る。

「まったく、仕方ねえなあ。わあったよ！一緒に帰るか！」

「アン！」

俺の言葉に満足したのか、イギーは一際大きく鳴いた。
そして俺達は、一緒に家まで全力でダッシュした――

プロローグという名の第一話（後書き）

感想お待ちしております

刺客の影（前書き）

いつも通りブレない駄文なのは仕方ない。

感想お待ちしております

刺客の影

○
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

ここは、とある世界にあるとある宮殿。

⌋
⋮
⌋

宮殿の奥に存在する玉座に、ある金髪の男が座っていた。

その男の首と身体は糸のようなもので接着されており、肩の部分には星型の痣が存在している。そう、静丞のと同じ形の痣が。

「ツ！？」

ガバツ！と男は不意に立ち上がると、何かを感じ取ったかのように上を見る。

男は一時の間、驚いたふうな表情をしていたが、急に笑い始める。

「クッククックッ。遂にスタンド使いとして覚醒したか。憎きジョー・スター家の最後の人間よ」

そう言つて男は接着している部分を手でサササスと撫でると、**擽**猛な笑みを浮かべた。

この男は、かつて600年ほど前にジョースター家の最初の波紋の戦士が倒した男であり、最強最悪のスタンド使い。

「さあ、早くここまで来い。ジョースター家最後の人間よ…。このDIOが、お前の血を吸い尽くし、この身体を完全に私のものにしてくれよう…。クククク…ハッハッハッハッハ！」

そう言つてDIOは笑い続ける。
ジョースター家を滅ぼせることを嬉しく思いながら、楽しく思いながら……

「ッ！？」

どこからか笑い声のようなものが聞こえ、同時になにやら邪悪な気配を感じ、反射的にスタンドを出す。

「……」

『どうしたんだよ？』

「いや、なんでもない」

ノー・ダウトにそう言つと、気のせいだったかと首を傾げ、目の前にあるシュークリームに手を伸ばす。

ここは『翠屋』。この海鳴町でも有名な喫茶店で、中でも今食べられているシュークリームは絶品だそうだ。たしかに、かなり絶品だ。

「うむ。うまいな」

『ああ……。俺も食いたいッ！？』

「アンアン！」

「ほいほい。イギーも食べたいのな。ほれ」

「アオン！」

シュークリームを欲しそうに鳴くイギーを見て、俺が頼んだ三つのシュークリームのうち、食べていない一つを皿にのせ、丸々あげる。

嬉しそうにシュークリームがつつくイギーを見て少し微笑み、

悔しがっている　　ノー・ダウト　をジト目で見る。

「ふう……」(ところで、なんであの女は　　ノー・ダウト　がい
るところを見て驚いてるんだろうか?)

チラリとウェイトレスをしている茶髪ツインテールをさり気なく
見た。

中々見える顔だが、大した興味は沸かない。

『ふうん……。あの女もスタンド使いかねえ』

「だとすれば、敵かもな」

小声でそう返すと、シークリームを一口に放り込む。

イギーはそれなりに味わって食べていたようだが、もう残りは少
ない。

財布の中を確認し、ちようどの金額を取り出すと席を立つ。

「さ、帰ろうかね。イギー」

「ワン！」

レシートを持ちレジに向かうと、財布から取り出していたちよう
どのお金を渡す。

「はい、ちようどの金額ね」

「さって、帰ろうか。イギー」

そう言ってイギーを胸に抱くと、『翠屋』から外へ出た。

「？」

一瞬だけ、どこからか視線を感じたが、気のせいだろうと結論づけ、そのまま家路についた。

「一瞬だけ……こちらを見た？」

DIO様よりの指令を受け、黒条 静丞を監視していたが……まさか、一瞬とはいえ気づかれるのは予想外だった。

「今までのスタンド使いは、私に気づく前に殺されいましたが……今回ののは中々楽しめそうですね」

ペロリと唇を舌で濡らすと、横から近づいてくる足音に気づき、そこを見る。

金髪の髪をした男が一人に、ピアスをチャラチャラと着けた男が一人、あとは……特筆すべき特徴がない普通の男が一人いた。

「おお！カワイイ子じゃん！」

「なあなあ。ヒマなら一緒にお茶しない？」

「そうそう。その後一緒にホテルまで行こうぜえ？」

三人のセリフに対し、ゾワツと背筋に寒気が奔る。

「おぞましい……。まったく、オシオキ が必要みたいですね」

ニヤリと笑いながら言うと、懐中時計の蓋を開く。
時間を確認したのではない。これはただ、私の中の私を呼び出すためのスイッチだ。

「さあ…ブチ殺してあげましょう」

同時に、無意識のうちに口の端を吊り上げる。

「さあ、盛大に参りましょう。 フランドール・スカーレット！」

舞台上の役者のように腕を広げると、私は自らのスタンドを呼び出す。

宝石のような物が着いた翼のようなものを広げた金髪の少女は紅い巨大な剣を振るい、ニヤリと邪悪に笑う。

「あ？なに言」

ピアスをチャラチャラと着けた男は、最後までセリフを言い終えることなく、その身体にいくつもの大穴を開けて、ただの肉の塊と成り果てた。

「え？ど」

特徴の一切ない男もまた、最後までなにかを言うことなく、今度は上半身がキレイさっぱりなくなった。

「あ、あああああ……」

最後に残った金髪はその場に尻餅をつき、ただ怯えながら私を見ていた。

そんな男を見逃すような慈悲の気持ちは私には一切ないため、冷酷に宣言する。

「そうね。 あなたはまだ優しく殺してあげる」

そう言って男の 眼 を 探す。
そして、ようやく見つけた男の 眼 に照準を定めると、 フ
ラン と同時に掌を伸ばし……

『キュツとして……ドッカーン!』

掌を握り、 眼 を握りつぶす。

すると、その男はまるで内部からダイナマイトが爆発したかのよ
うに、 爆発 した。

ビチャビチャとそこら中に飛び散る血肉を見て私は僅かに笑うと、
地面に飛び散っている血を指ですくい取ると、舌で舐める。

「……不味い」

久しぶりに舐めた血の味はとてつもなく不味く、思わず吐き出し
そうになった。

「ああ。この口直しは、あなたの血で補ってもらいますよ? 黒条
静丞」

『あはは。ああ、簡単に壊れないでよね? オニイちゃん?』

私は、これから味わうことになるであろうスタンド使いの血の味
を想像して舌なめずりすると、 フラン はこれから戦うことにな
るスタンド使いのことを想像して、笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6634z/>

ノー・ダウト・メモリー ～疑いない真実の記憶～

2011年12月24日08時47分発行